

## 「JENESYS2017」中国青年メディア関係者代表団第1陣

### 参加者の感想（抜粋）

#### 第1分団（少子高齢化）

私が参加したグループは“少子高齢化”をテーマに視察を行った。約1週間の滞在中、巣鴨地蔵通り商店街で自由取材を行い、日本の高齢者の元気な暮らしを感じた。和気あいあいとした生活への活気と生きることへの情熱が、高齢者たちに生活の楽しみをもたらしている。日本人の長寿の重要な要因は、精神面での若さであろう。当然ながら、老後の負担が比較的軽いことも、高齢者たちが生活に満足できる大きなプラス要素である。

ボナーズ横浜の視察では、スマートサービスは老後の暮らし方を変えられると感じた。中国では現在“国のレベルで主導し、コミュニティが主となり実施する”方式の、居宅での老後生活を推進しており、ボナーズ横浜の手法からもいくつかの実績が参考にできる。例えば、より一層のスマート化やヒューマンケアに配慮した住宅デザイン、シニアコミュニティに対する管理モデルなどである。この分野は、中国も今後20年から50年の間、著しく発展するであろう。

島根県邑南町の訪問では、子育て支援への行政施策の視察を通じて、自治体が資金援助や優遇措置などの福利施策を行い、人口増加を期待し奨励していることを知った。

少子高齢化による人口面での社会問題、例えば就業や不動産などの問題は、日本や中国のように人口の多い国では、今後の発展において必ず直面し、且つ解決しなければならない問題である。短期間の視察を通じて、感覚的な認識を得られた。より良い解決方法は、帰国後に研究を重ね、観察と思考を重ねる必要があるだろう。

#### 1. メディア分野の相違点と共通点、および参考となる点。

現在、中国の従来型のメディアは、インターネットの急拡大によって次々とその形態を転換し、ニューメディア専門の権威あるメディア機関も数多く誕生している。しかし、日本では、完備された著作権制度やメディアのメカニズムの違いなどの理由から、ニューメディアはまだ周囲を焼き尽くすほどの勢いはなく、従来型のメディアもニューメディアのプラットフォームを試行している程度で、メディアの融合とは程遠い。山陰中央新報社などの地方紙では、人々に新聞購読の習慣があることや住民文化の違いにより、現在でも発行部数は安定且つ微増している。これは、購読習慣のある読者に対する正確な位置づけや、内容が読者に寄り添っていることが、成功の要因の一つである。

日本は地震多発国であり、メディアにも論理的な地震報道の事前対応策とフローチャートが整っている。これは、中国の地震多発省でも参考にする価値がある。例えば、気象庁との間に連動メカニズムを構築し、レベルに応じた事前対応策を制定するなどである。

山陰中央新報社は百年の歴史があり、そのデータバンクの確立には敬服した。人々が何もかもコンピュータに依存している今日にあって、山陰中央新報社では新聞の切り抜きを断固として続け、重要な報道を分類して冊子にし、年別、報道内容別、紙面別などの閲覧の便を図っている。

#### 2. 印象深かった点：日本の高齢化の深刻さ

私のホストファミリーのお母さんは今年78歳で、未婚の息子さんと同居している。少子高齢化の代表例と言えるだろう。青年層はプレッシャーが大きいために、結婚し子供を育てることを望まない、或い

はできないでいる。このことは高齢者の悩みともなっている。またもう一方で、高齢者の寿命が延びていることで、いかにして良質の晩年を過ごすか、ということも、注目すべき問題となっている。

訪日体験の感想は、完備されたインフラ、ヒューマンケアなサービスなど、たくさんある。第1グループの視察テーマは少子高齢化である。滞在中、各訪問先では、少子高齢化の現状や対応策、こうなった原因などについて、詳細に紹介してくれた。中国もすでに高齢化社会に入っており、日本が歩んできた道は中国もいずれ体験するものであり、それはより一層深刻なものとなる。

まもなく高齢化に突入する社会における一人の青年として、日本での見聞は感じる事が非常に大きく、メディアの一員としての責任とプレッシャーも明白になった。

日本は少子高齢化問題に対して、すでに良い成果を上げている。島根県が人口増加の推進のために取り組んでいる対策はとても参考になった。例えば、いわみ西保育所では、1歳から6歳までの年齢ごとのクラスを設け、幼児を持つ保護者の育児負担をうまく軽減しており、育児と仕事との選択という難局を乗り越えることができる。また、日本では高齢者への保障とサービスの手法が成功していることも非常に勉強になった。私は今回の訪日経験で得た、紹介し普及していくべき情報を、自分の仕事のメリットを活かして、読者に向けて力強く発信していきたい。

## 第2分団（農業）

今回の訪日プログラムのテーマは農業である。農業というテーマは非常に大きいものである。千葉大学の植物工場は平均寿命が20年もあり、使用して6年目でも新品のように清潔で、人工光照射設備や、ソーラーエネルギーの利用、防虫ハウスなどを備えていた。我々が実際に見学し、試食した水耕栽培で生産したトマトやレタスは、汚染のないグリーン栽培で、とても甘くておいしかった。ふくい園芸カレッジでは、農産品選別機を使用し、販売時のニーズに応えるべく、重さや大きさの異なるトマトがいかに正確に選別され袋詰めされるのかを実際に見学した。福井県のブリーフでは、福井県のブランド米とブランド野菜(福井百歳やさい)のブランド化販売について学んだ。

日本では農業は地位ではなく、職業である。ふくい園芸カレッジの、警察官から農家に転身した例がそれを証明している。就農は自由な選択であり、生活のシフトである。有限な土地資源も、日本人はそのわずかな土地の利用価値を高め、習得しやすい簡便な技術によって、就農を普及させ、産業化している。ふくい園芸カレッジの研修には、2年間学費免除の農業研修過程があり、短期間でシステムティックにゼロから技術を習得できる。ここでは農業生産に対して積極的に政策支援をしていることが分かる。

我が国が今まさに貧困対策に取り組み、対象者の状況に応じた対応と貧困脱却を行うにあたり、いかにして技術を届け、思考を転換させていくのか、この問題は、指導者が一人で奔走して済む問題ではない。新技術の普及応用をモデル化し、産業化した生産方式と連携して、村民たちの潮流にし、人々の喜びへと発展させれば、我々の足取りも一層加速するであろう。

来日は初めてではなかったが、ホームステイは初めてで、その体験はとても幸せで素晴らしいものだった。我々を受け入れてくれたホストファミリーは典型的な福井の三世代家族である。都市部では少人数の家庭が中心だが、この地域では三世代同居がとても普通のことだった。お父さんは我々を海辺に連

れて行ってくれ、夕日を眺め、温泉につかり、地元の人しか味わえない自然の光景を体験することができた。海があり、山があり、誰であろうとも幸福を得ることができる。お母さんはテーブルいっぱいに夕食を準備してくれた。さらに、公民館に勤めるお姉さんがおり、この方はとても明るい性格で、二児の母である。彼女と、彼女の9歳の娘さんと7歳の息子さん、そして18歳になるオスの猫と一緒に、食事をし、おしゃべりをし、とても忘れがたい夜を過ごした。翌日の離村式では、お母さんがわざわざ戻ってきてハグをしてくれた。その瞬間、思いがけず涙があふれた。上海でもホームステイ受け入れの機会は少なくない。私も、外国の友人たちに中国の家庭の団らんを味わってもらおうと思う。

日本のメディアとも交流を行った。我々はフジテレビジョンと福井新聞社を訪問した。日本では、従来型のメディアに対するニューメディアの攻勢は、中国ほど深刻ではないようだ。日本ではゴールデンタイムに60%の人々がテレビを視聴しており、福井新聞社の新聞発行部数は20万部に達する。ホームページやアプリケーションの開発においては、中国のWeibo、WeChat、インターネット配信の伸びに比べ、その速度は早くないものの、全体的な傾向は同じである。購読習慣の変化に伴って、記者の取材や編集、記事の執筆への要求は高くなっている。今後も自己研さんに勤めて、自分の仕事や職場で大きな発展を目指したい。

8日間の視察や見学を通じて、最も強い感想を一言で表すとすれば、「日本の最も美しい景色、それは人」である。日本というこの美しい国において、人々の友好、親切、善良、謙虚さにとても感動させられた。日本人の資質の高さや、サービスや職業意識の高さは、以前から聞いてはいたものの、実際に体験すると、より心の深い部分から感じる事ができた。自動車は歩行者に進路を譲り、ホテルでは出発時にスタッフが手を振って見送りをしてくれ、年配のスタッフもとても丁寧にお客にサービスをしてくれる。公共の場所ではどこでも親切に道を教えてくれ、商店で落とし物をした時も、遺失物預かり所ですぐに発見できる…。すべてがとても心地よく感じる。

専門分野の視察の感想：日本人は新聞購読の習慣を維持しているということに、とても驚いた。日本のメディアも、インターネットの攻勢下にあって、それなりの対応に取り組んでいる。例えば、福井新聞社では有料の電子版(福井新聞D刊)を発行しており、中国にも似たような手法がある。

参考にすべき点：

- ・物事に真剣に取り組む日本人の姿勢を学ぶ。
- ・職人精神と謙虚な性格。

日中両国の相違点：

- ・日本のインフラは素晴らしく、交通は便利で施設も完備されている。中国のインフラはまだこれほどの水準に至っていない。
- ・日本人には粘り強い職人氣質があり、さまざまな製品を精緻に綿密に製造する。中国もこの点を強化していく必要がある。

共通点：

- ・両国はともに伝統文化の継承を重視しており、多くの伝統文化が現在でも確固たる生命力を持っている。
- ・高齢化の問題に直面している。若い世代と高齢者とは生活習慣が異なり、考え方も異なるため、社会においてある程度の困難が存在している。

- ・農業面。農業人口が減少しており、農村の都市化に伴って農村の衰退問題に直面している。後継者不足により、伝統ある集落が危機に直面している。

印象深い点：

- ・農家でのホームステイでは、ホストファミリーの子供がとても親切で礼儀正しく、純真で可愛らしく、友好的だった。日本人の子供に対する教育は言葉だけで教えるのではなく、行動で教育し、子供たちの道徳心や人としての修養を育成するのだ、と身をもって感じた。
- ・日本の一般の人々は中国に対して誤解している面がある。例えば、中国の一人っ子政策は国民の権利を侵害していると考えている。こうした部分は、今後も交流を強化しコミュニケーションを図っていく必要がある。

### 第3分団（建築と不動産業）

「海内知己を存すれば、天涯も比隣の若し」（心の知れた友がいれば世界のどこにいても近しく感じる）。私の初めての訪日の旅が間もなく終わろうとしている。感想はとても多い。数日間、私は代表団の一員として日本を訪問し、日本に対する理解を深め、日本文化の魅力を体感した。

毎日新聞社、岩手日報社の訪問。毎日新聞社は日本第3位の大手新聞社であり、岩手日報社は岩手県では最大の発行部数を誇る新聞社である。前者は全国紙、後者は地方紙である。彼らの手掛ける、国際ニュースと災害関連ニュースの報道が強く印象に残った。“職人”の報道精神であった。

不動産関連の視察では、十分な成果があった。三井不動産(株)柏の葉スマートシティのコンセプトは、環境共生都市・新産業創造都市・健康長寿都市というテーマで未来に着眼した建設を行い、将来を見据えた理念を持っている。紫波町オガールプロジェクトではPPP(公民連携)を模索し、地方の不動産の新モデルを進めている。

独特な日本の歴史的文化や現代的文化の魅力の体験。我々は、東京タワーや世界遺産の平泉中尊寺、岩手県立美術館を見学し、盛岡で温泉も体験した。自由取材では、自分の目で日本の一般市民と交流することで、日本の独特な魅力を体感した。

訪日視察日程は8日間という短いもので、日本の社会の表面を観察したに過ぎないが、それでも非常に強い印象が残った。

日本人は物事を綿密に行い、細かい部分まで徹底している。我々の日程も分単位の正確さで、わずか8日間の日程に50ページ以上の旅のしおりが用意された。各訪問地ではさらに詳細な資料が配られ、用意万端であった。滞在中に目にした建築現場はすべて布で覆われ、砂ぼこりの飛散防止が施されており、新幹線車内にはプライバシーの保てる洗面所や、公衆電話もあった。ホテル入り口の雨よけ、ウォシュレットトイレ、さらに、今朝の朝食時には新聞が置いてある脇にアルコール消毒液もあった。これらは、日本人には当たり前の習慣になっているようだが、我々にとってはとても物珍しいものだ。こうしたヒューマンケアの理念は、学ぶべきである。

新聞社の視察を通じて、両国のニュースの体制には異なる点があるとはいえ、相互交流の可能性もあると気付いた。毎日新聞に掲載された、消防隊員が生まれたばかりの赤ん坊の命を救い抱えている写真が賞を獲ったことは、四川大地震の際に撮影された多くの感動的な写真ととても似ている。それは、その背景に、人間としての喜びが表れているからである。岩手日報社が掲載した、被災者の生涯のエピソ

ードや、自然災害の中で生き延びる方法を掲載するなどの報道も、我々への啓発となる。

ほとんどの日本人はとても親切である。街角で親切に指をさして道を教えてくれた若者や、農村でホームステイを受け入れてくれたご年配のホストファミリーが、私に気付かせてくれたことがある。それは、一つの国、一つの民族を理解するには、マスメディアの報道のみに頼るのではなく、実際に自らがその土地を歩いて、見て、その国の人々と交流することが大事であり、そうして初めて、双方の民間交流が広がり続け、中日の子々孫々までの友好という目標に向かって前進できるのだ、ということである。

日本は発展した資本主義国家であり、この国が直面している少子高齢化や農業問題、都市化の問題は、中国や世界の他の国々も将来的に遭遇する社会問題である。日本の経験を学ぶことで、我々は余計な寄り道を避けることができる。

8日間のプログラムで、忘れがたく深い印象が残った。日本人の生活のさまざまな角度から、日本の経済建設の素晴らしい成績が読み取れる。私の所属した第3グループのテーマは「建築と不動産」であることから、私自身も“スマートシティ”や農村の“村全体での推進”について、若干の意見を述べたい。同時に、この分野では、中国も参考にすべき点があると考えている。

日本のスマートシティや全村推進の建設は人間を中心に構築されており、生活を便利に、より快適にすることに重点が置かれている。柏の葉スマートシティや紫波町オガールプロジェクトの事例を見ると、多くの技術が、家庭や生活習慣や住民のニーズと緊密に直結しており、生活での実用性が高い。例えば、エネルギー消費を可視化するソフトウェアは管理を容易にし、電気自動車の充電スタンドと家庭電源との連結は、自動車の残電力を家庭の緊急用電力に用いることができる。

また、これらのプロジェクトは民間企業が主体となって進められているため、市場ニーズが把握しやすい。日本の数社の大企業は、エネルギー資源の乏しい日本の国土やエネルギー価格の市場化といった大前提の下で、自社の専門技術を基礎に、どの会社も省エネ省資源のトータルスマートソリューションの開発を重点に置き、コストの削減を総合的に勘案し、多様な選択を実現して、家庭や社会のニーズに応えている。

従って、我々は日本の都市化の経験を学び吸収し、都市の発展建設に利用すべきだと思う。